

令和3年度 東広島市総合教育会議 議事録

1 日 時 令和3年11月30日（火） 開会14時00分 閉会15時40分

2 会 場 東広島市役所本館3階303会議室

3 出席者 (構成員)

東広島市長 高垣 廣徳

東広島市教育委員会

教育長 津森 毅

委 員 渡部 和彦（教育長職務代理者）

委 員 坂越 正樹

委 員 京極 秀樹

委 員 島本 智子

委 員 西村 恵子

(その他の出席者)

学校教育部長 國廣 政和

教育調整監 田中 宏憲

指導課長 木村 健二

(事務局関係)

総務部長 梶永 里美

総務部次長兼総務課長 間所 克成

総務課課長補佐兼行政経営係長 村上 雅之

行政経営係 主任主事 永登 美穂

4 議 事 西条独創教育と新たな時代に求められる個別最適な学びについて

5 内 容

○開 会

○高垣市長あいさつ

○議 事

西条独創教育と新たな時代に求められる個別最適な学びについて

<高垣市長>

それでは、早速でございますが、議事に入ります。

協議に入る前に、議題につきまして、事務局から説明をお願いします。

<事務局>

本日は、「西条独創教育と新たな時代に求められる個別最適な学びについて」を議題としております。

文部科学省の中央教育審議会において、目指すべき「令和の日本型学校教育」の姿の一つとして、「個別最適な学び」が示されました。この「個別最適な学び」においては、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められ、「協働的な学び」と一体的に充実させることで、「主体的・対話的で深い学び」を実現することが求められています。

本市の学校教育の一つを振り返ってみますと、檜高憲三氏が展開した「西条独創教育」があります。鐘なし日や相談学習などといった独創的な活動を行い、学習者起点の学びや対話的な学びを目指しており、現代の教育にも通じる教育理念です。

今日の学校教育では、子供たちの多様化や教師の長時間労働による疲弊といった様々な課題に直面しています。こうした多くの課題がある中、教職員に対しては、子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たし、誇りを持って働くことができる姿も求められています。

そこで、いかにして新たな時代に求められる「個別最適な学び」を目指していくのかについて、市長と教育委員会とで、意見を交換し、これからの時代の教育の在り方についての方角性を共有すべく、本日の議題とさせていただきました。

議題についての説明は、以上でございます。

<高垣市長>

次に、学校教育部から資料の説明をしていただくのですが、私が今回の議題で皆様方と議論をしたいと事務局に話をしました。

その背景として、どのようなことがあったかという、この地に来て本当に教育力の高さというものを実感しました。それは様々な数値的なものにも出ているのですが、やはり教職員の方々の熱心さというのが、それを裏付けていると思っています。その背景にどのようなことがあるのかということを調べてみました。もちろん、津森教育長からもお話を聞きながらです。すると、ここには西条独創教育という伝統があるということでした。

今からほぼ100年前の1923年、あと2年すると100周年を迎えるわけですが、当時26歳でこの地に赴任した檜高憲三氏が、千葉命吉氏の独創教育理論というものを展開します。その中で西条独創教育というのが始まり、わが市の教育に大きな利益をもたらしました。100年前に非常に個性を大切にする教育が、この地で展開されていたということは私にとって驚きでした。

まさに今、文科省も個別最適の教育を、個々にあった教育をどう展開していくのかという

ことが大きな議題になってきた。一方では、コロナの影響もあるが、昨年すべての子供にタブレットを配布できることになって、新たなデジタルによる教育というものが求められるようになり、このテクノロジーを使うと、まさに個を中心とした教育ができるような新しいツールを我々は手にしたわけです。

そうしたときに、わが市にあった伝統を活かしながら、西条独創教育を発展した形のものがこれから求められるのではなかろうか、という仮説を持ちながら、最近の市の教育行政を見させていただいているところです。

一方で、教職員の皆様方には非常に過剰な業務の負荷がかかってきているという実態もあります。少なくとも独創教育を展開するためには、非常に教師の方が熱心で、個に応じた教育をどうするかということを日々、実践の中でいろんなものを取り入れながらやっていって、初めて展開できるということですね。

檜高校長先生に関する本の中に堀越先生が出てきます。堀越先生は、今、高屋にお住まいで、2年前に100歳の褒章の伝達に行かせていただいたが、本当にかくしゃくとした方です。そこで檜高憲三氏の話が出ました。こういう教育が展開され、やっぱりすごい情熱を持った方々が集まっていたが故に、そこで西条独創教育が生まれ、そしてその伝統が今なお、少し形が変わっているかもしれませんが、残っているということなんです。

県教委の方に話を聞いても、この東広島の教育というのは、まさに県の教育を、義務教育をリードする地であるというふうな認識を持っているんですね。そういう背景があり、来年再来年が、檜高先生が赴任されて100年になります。それに向けて、今の時代に合う新しいテクノロジーも手にした時代における独創教育はどうしたらいいのかというようなことが私の問題意識であります。

そういった話を今日議論させていただければということで、このようなタイトルといたしました。

それでは、学校教育部から資料の概要について、説明をお願いします。

(教育調整監説明【資料1～5】)

<高垣市長>

どうもありがとうございました。

学校教育部の説明にもありましたように、100年前の教育が今なおこの地に息づいて、それが本市の教育の根幹をなしているというお話ですね。そういう中で、教職員の皆さんの教育環境、忙しさであるだとかがあり、一方では新しい時代に向けた様々な問題があるということでもあります。

今日はこういった議論の進め方をしようか迷っておりまして、まず最初に今の説明で少し疑問に思われること、確認したいことがありましたらお聞きしたいと思います。

それから、資料4として学校教育における今日的課題、それと資料5がその解決の一つの糸口になるであろう支援組織といいましょうか、サポート組織というのでしょうか、そういうことをしっかりする中で、教員の皆さんを指導するなり、レベルアップに向けた取り組み

をしていくというようなことになろうかと思います。

そういった形で進めさせていただけたらと思います。まず資料について何かご質問などありましたらお願いします。

それでは、西条小学校で校長もされた津森教育長から、まず西条独創教育の今日的意味についてご紹介いただいて、それから課題などをお願いします。

<津森教育長>

私が西条小学校の校長をしたといっても1年3ヶ月ほどでしたが、最初に先生たちに言ったことは、駅の裏にあった西条小学校の教育について知っているかということです。しかしほとんどご存知ない。先生方たちも若いので、駅の裏にあったんですかみたいな話になります。研究発表会を毎年して、全国から先生が二千人も来ていた話をして、当時の写真や檜高明子さんの本も紹介したりして、そういうところをあえて取り上げた経験があります。

というように、西条小学校の先生でもそうなので、他の学校の先生方はもっと知らないだろうなと思っています。聞いたことぐらいあるかもしれませんが、これは、私たちの世代にも責任があるのかなというふうなことも思います。

今の時代に、かつて西条小学校で行われた独創教育がどんな意味があるのかということを改めて考え直すと、確かに原点はそのあたりにあったなということを感じるわけです。

冒頭、市長からありましたように、タブレットを配布しました。これは全国全ての自治体が行ったことです。そのタブレットについて、先生も子供もどう活用して授業をするのか、それで遠隔的な部分からオンラインをどうするのかということは全市町の目標であって、それをある程度できるようになったら、それで終わりなのかということ、実はそれを活用して、その上にどういう教育をするのかということが求められるということになります。

それは何かと考えたとき、先ほど学校教育部が説明しましたように、令和の日本型教育というのは文科省から出ておりますが、独創教育とつながる部分がたくさんあったということです。改めて、これをどう使いながら、これから求められる学校教育というのを先生方にもしっかり理解してもらえばいいかということは、問題意識として一つあります。

あともう一つ、実はその駅の裏にあった西条教育を支えたものは地域なんですよ。広い意味で見たら、その地域性には町の問題があったけれども、有志の方々が財政的にも、それから労働的にも支援を惜しまなかった。そういう地域との関わりの中で、学校が支えられたという側面を持っています。

このことについては、今コミュニティスクールということが言われますが、そういう意味でコミュニティスクールという新しい今の課題とも直結している。そういうことになると、教育の内容もそうだし、学校を支える部分もそうであり、改めてスポットを当てて、新しい時代の教育を進めるための原動力にしていくということは意義があるのではないか、そういうふうに考えております。

<高垣市長>

ありがとうございました。

教育長から地域が支えたというお話を聞きながら考えましたのは、昨年あたりからコミュニティスクールの話をしながら、地域が学校を支えていくような取組みの中で教育を展開していくようになっており、知らず知らずのうちにその西条独創教育が復活しているのかな、そんな取組みになったという感じがしたところです。

それではまず、お一人ずつ今日の資料を見て、概括的なご感想なりをお聞きして、それから個別の課題について掘り下げていくような形で進めさせてさせていただこうと思います。

渡部委員から、総括的に何かありましたらお願いします。

<渡部委員>

西条の独創教育というのはよく耳にしますし、町を歩いてもそういう看板が立っているのを見たり、駅の裏に立派な「独創」という石碑が建っておりまして、前から色々とその逸話を伺いますと、すごい先見性のある校長先生でいらっしゃったのだなと考えて、感じておりました。

くららで子供たちの発表を拝見したんですけども、この檜高校長の実践を事細かく報告、展示されておりまして、非常に感銘を受けたところです。

100年ほど前と、今のタブレットの話を聞きますと、全く隔世の感があるわけですが、教育の原点ですかね、そういうところは決して変わっていないのだと思います。

そういう意味でも、先見性と同時にやはりこの地域が、地域の子供たちを支える、今で言えばPTAですかね、そういう人たちを巻き込んで、町を変えていったということは、まずこれは非常に特筆すべきことではないかと思います。

ですから、ただ地域が支えたというだけでなく、そういうものを支えていただくような仕組みを作られたというのは大変素晴らしいことだと思います。時代が変わっても、今日の課題の一つにあるように、現場の先生方をどうするか、先生方の悩みをどうするかという課題があります。これも技術的にどんどん進歩していく中で、先生方の研修の在り方というような現場的な問題を明らかにして、それを支援するということ、そして、その根っこにある教育の理念とか、そういうところは、今に通じるものを再確認したいと思います。

この東広島で活動していらっしゃる教職員の皆様方が自信を持って職場に、誇りを持って行けるという、そういう方向にいければいいなと思っています。

<高垣市長>

どうもありがとうございました。

それでは、坂越委員からお願いします。

<坂越委員>

事務局にお願いして資料を1枚追加させていただきました（【坂越委員提出資料】参照）。

今話題になっていますけれども、令和の日本型学校教育ということを考えたときに、特に個別最適な学びを支える教員の問題というのが、かなり大きな課題になっているということです。現在、中央教育審議会が特別部会を作って、令和の日本型学校教育を担う新たな教師

のあり方ということについての審議が進んでいます。

用意していただいたのは11月15日の特別部会のまとめ資料です。

簡単に説明します。教員免許更新制度がなくなります。おそらく来年のうちに。それに代わるような研修の体制をしっかりと作るべきだというのは当然出てきていて、その一つの方角性としてこの資料が示されています。

真ん中上の段の、「令和の日本型学校教育にある教師の学び」について、「学び続ける教師」それから「教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢」そして、子供と同じなんですね、「個別最適な教師の学び、協働的な学び」とあります。

だから、子供に個別最適な学び、協働的な学びを教えるためには、教員も個別最適で協働的な学びをしなければいけないという、こういう方向性です。そのために、具体的にどんなことをするのかというようなことがあります。

2番目の見出しですけれども、早急に講ずべき方策として、例えば、公立学校教師に対する学びの契機と機会の確実な提供ということで、任命権者が教員研修計画に基づいて研修の履歴を記録管理する。まさに、スタディログみたいなところを作っていくということです。

それから、そういうシステムのことは置いておいて、2行目の方が大事だと思うのですが、管理職等が教師との対話を通じて、教師が積極的に自らの資質の向上を図るような研修に行くように、そして3行目には市町村教育委員会の行う研修や学校における校内研修・授業研究など、こういうものも含めて研修の蓄積、そういうデータを蓄積していくんだというようなことが書かれています。

あとは省略しますが、やっぱり現場の学校教育と直に関わっている市町の教育委員会が実際の先生方とアクセスしながら、そういう先生方の研修を支えていくということが、とても大事になるということ。それから、この中にも少しあるのですが、その時に教育委員会と並んで大事なのが管理職です。先生が研修する時に、校長先生がきちんと対話的に先生方の学びを支えて、エンカレッジしていくというような、管理職と教員との対話ということも強調されています。

せっかく今日は東広島市教育センター的組織の必要性ということで、具体的にどういうことができるのか、多忙な先生、新しいICT技術を習得しなきゃいけない先生、そういう先生に対して市が支えることができる体制づくりということで、ぜひまたお願いをしたいというふうにも思っています。

<高垣市長>

論点を明確にさせていただいて、どうもありがとうございます。

後程、その視点から議論をさせていただきたいと思っています。

それでは、京極委員お願いします。

<京極委員>

西条独創教育について、名前は知っていましたが、内容は初めて勉強させていただいたところです。これはなかなか考えられているなと思います。今の教育の大事なところも含まれ

ています。ただ、これをやろうと思うと、教員だけでは、今はやらなければいけないことがすごく多いし、時間的に多分足りないと思います。

市長がおっしゃったとおり、外の力をいかに借りるかということが大事なところかなと思います。その中できちんとしていかないと、本当に中身のあることはできないと思います。例えば、今日の課題のところにGIGAスクールの推進など、様々な項目が並べてありますが、ここに書いてあることは、まだあくまでも受動的なことのようだと思います。

本当に独創教育をやろうとすると、もう一步突っ込まないといけないので、そのときに教員だけできるのかということと難しいのかなと思います。そういうところは外の力、大学や企業などの力を借りて行うことが大事かなと思いますし、いろんな分野の外部の力を借りるプログラムを作っておくと、子供達が選択する余地がぐんと増えて来るのだと思います。

そういうところも、せっかく東広島にはあるのだから、そこをうまく具体的に作ってあげば、もっと具体的に動いていくのではないかなと思います。ここに書いているのは総花的で、本当にやろうと思うと具体的なものがないとなかなか動かないです。

一遍にたくさんやる必要はないですけど、ひとつずつ増やしていけば、子供たちが自主的に好きなことをやるという方向になるのではないかなと思います。

<高垣市長>

ありがとうございました。

GIGAスクールも緒についたばかりで、それをいかに活用するかという点においては、積極的な、能動的なところまでは、実際には行っていないんですね。それをいかに活用しながら、これまであった資産を共有化していくかということが大切だと思います。

そういう意味で、どういう枠組みなどが必要なのかというのが、この後の議論になってきそうな気がしました。

島本委員は西条小学校でも校長先生でしたよね。

そのあたりも含めまして、ご紹介ください。

<島本委員>

私は教諭として5年間、校長として3年間、西条小学校で勤めさせていただきました。いただいた資料にありますが、「指導の個別化と学習の個性化」や「個に応じ個を活かした教育」「オープンスペースやコンピュータを活用した指導」「ティームティーチングを取り入れた指導の工夫」などに西条小学校が取り組んだのは平成になってすぐの頃でした。

あの時は皆で遅くまで頑張りました。働き方改革なんてあの頃なかったかなと思います。みんなで「価値ある苦勞しよう」という言葉を合言葉にこれまで実践例のない新しい学びを創造するという研究や実践への挑戦でした。地域や専門家の方を授業のゲストに招きダイナミックな授業の展開を工夫しました。

その時のめざす子ども像は「自ら学ぶ子ども」でめざす教師像は「創造と協働する教師」でした。今日求められている『主体性』や『協働的』につながっていることを感じます。

100年前に築かれた独創教育の流れが時代を越えて、今も脈々と継承と創造を繰り返しな

がら受け継がれていると思うと背筋が伸びるような気がします。

校長になって学校経営や戦略のことを考える時に、「好きか嫌いかは自分が決めて、良いか悪いかは保護者や地域が決めて、それが正しかったのかどうかは歴史が決める」ということを言われていました。100年前のことが今でも令和の教育と重なるというのは、やっぱり当時の校長の先見性の素晴らしさだと思つづく思うところです。

大先輩と働き方改革の話をする、「私たちの頃は働くという意識はなかった。子供を育てる。勉強が分かるようする。子供達が社会で困らないように、恥をかかないように、学力をつけて、挨拶がちゃんとできるように、と慈しんできていて、働くという感覚はなかった」と言われます。

今は働き方改革に取り組むことは大事なことで、そのことがいけないというわけではないのですが、それぐらい一生懸命、教員というものに誇りを持って働いておられた時代だったんだと思います。

でも、今そのことをそのまま学校現場に持っていこうというのは無理な話ですので、機械の力を借りればいいし、地域の力も借りればいいし、専門家の力も借りながら先生方がやりがいを持てるよう働きやすい職場づくりに努めることは必要なことだと思います。

最後に、教育センター的組織についてです。

学校の中には「あいうえお」が必要です。『あ』は「あこがれ」、『い』は「慈しみ」、『う』は「潤い」、『え』は「英知」、そして『お』が「恩送り」です。「恩返し」ではなくて「恩送り」です。同じ職場で助けてもらったり教えてもらったりしたことに対してお返ししなければと思ってもなかなかできないという状況はあることだと思いますが、「恩返し」は出来ないけど恩を送ることはできるので、自分ができるようになったときに、「送り」をすればいい。そうすると、退職した人たちが、もらった恩を送っていくという仕組みは、本人の生きがいも含めて、貴重な教育財産のバトンになると思われます。

<高垣市長>

ありがとうございました。

それでは西村委員お願いします。

<西村委員>

私は、子供が今、中学2年生と高校2年生になりました。島本先生が、西条小学校の校長先生、そして津森教育長が校長先生のときに、まさに2人の子がお世話になった保護者であります。

ただ、西条教育ということは、保護者の時には実は意識をしておらず、おそらく西条小学校の保護者でさえほとんど西条教育というものを、自分の子が受けているという意識がなく、小学校6年間を過ごして卒業してしまったのではないかと感じております。

それで、私がこの独創教育について知ったきっかけがございまして、それは西条市街地区社会福祉協議会のふくまち会議というもので、PTAの副会長をしているときに、講演会に呼ばれまして、その時にお話くださったのが、山内先生でした。

このときに初めて、子供が小学校3年生のときだったと思うので、もう7、8年前に、西条小学校の独創教育というお話を講演会で聞きまして、それでこういうものがあるかというものを初めて知りました。

なので、独創教育を知ったきっかけというのは、実は地域の方が催してくださったおかげで知ることができたということです。その時は、私も他県からこちらの土地に移り住んでおりますので、こういうものがあるんだということを知りましたし、そういったきっかけがなければ、おそらくそのまま普通の保護者は卒業してしまうんだなということを感じました。

それから、小学校の中にある、この「一隅を照らす」ですとか、体育館に貼っている文字を見たりとかして、小学校の中に独創教育も名残があるかなと見て回って、意識をした経験がありますので、それを自分がPTAに関わっているときにはなるべく、「ここにこういうものがあるよ」というお話を保護者の方にも、少しずつではありますけれどもした憶えがあります。

それで、資料1の独創教育について、率直な感想なんですが、2ページ目の檜高校長先生のふきだしの言葉で、先生は「教師」と言われているのですが、この「教師」というのを「親」「保護者」に置き換えてみたら、まさに家庭の中での教育というのも、先生がおっしゃられているようなことがとても大切だと思いました。

子供たちはそれぞれ自ら空想や思索などを行っているのに、親の経験などをもってその芽を摘んでしまうようなことをしているというのはよくないということで、まさに今、保護者の状況を見てみると、どうしても自分の経験から子供に物を言う、そういう家庭教育になってしまっているのではないかと。そして、昔の親と違って、転ぶ前に転ばせないように気をつけるという家庭教育が多くなっているのではないかと感じています。

実際、私が小学校の時に転んだ回数よりも、自分の子供が転んだ回数は減っていると思ひまして、男の子なのに転んでけがをして膝が血だらけになったときに、とても泣くので、自分もそこは多少過保護になって、気を付けなさいとか危ないからやめてとか言っていたかなということも感じました。

それで、独創教育ということで、西条小学校では「共創思考」というのを資料にあります、まさに独創教育をしながら、「他者と協働し、多面的・多角的に本質に迫ろうとする思考」というものは、東広島市の私のように他県から移り住んだものを受け入れて、そして学校や地域を発展させていくという思考に繋がるものではないかなと思っています。

そして、今の子供たちは、インターネットの普及、特に今のデジタルネイティブと言われる世代です。小学生以下でもスマートフォンで、いろいろな動画を見たりしている時代ですので、だんだん時代の移り変わりも感じながら、そういった子供たちに、どういった教育を、どういうふうに学校教育、家庭教育どういったものをしていいのかなと考えたときに、今の子供たちは実は私達親世代よりも早くから、いろいろな他者を受け入れるようなものをすでに目にしたり、耳にしたりしていて、まさに学校に入ってから学ぶのではなく、学校に入る前から教科書以外のことで、いろいろな多様性というものを学んでいるのではないかとこのように感じています。

実際、中学生ぐらいになると、「お母さんそれはSDGsの考えではないよ」と指摘される

こともありますし、それがもちろん学校で教えていることでありながら、なおかつ、それ以外の方法でそういう学習をしているのではないかというふうに今日考えております。

あと、GIGAスクールを進めている時に感じたことは、子供たちが実は個別最適な学びというものに関して、そういうことを学校が考えてくれているということが、子供たちにとってはとても大きな安心感になっていて、万が一、自分が学校に行きたくなくなってしまったとき、それでもタブレットを使って学習ができる。そして、それを出席、学んだことにしてくれるという、言い方は申し訳ないが、保険というか、一つの安心感を得ることによって、そこまでには至らないけれども、今日は頑張っ学校に行こう、体の調子が良いから行けるなという安心感。でも、だめな時はタブレットで学習することもできるということに繋がっていることを感じています。

ケースバイケースだとは思いますが、個別最適な学びというものを掲げることによって、子供たちが安心して学校教育を受けられるという、保護者としても安心感もあります。なので、タブレット活用は保護者の方からの期待が大きいのではないかと思います。

だからといって、すぐに何でもかんでもタブレットというのではなく、今まであったものを少しずつ大事にしながら、今までになかったものを取り入れていく教育というのが、学校でも家庭でも必要な形ではないかなと思っております。

<高垣市長>

どうもありがとうございました。

まず最初に皆様方のご感想を言っていました。

この西条教育を、実際に実践した方、或いは子供たちが受けられた方、さらに、直接的には関わりが無いけれども、教育的視点から見たときに、この西条教育の今日的な位置付けみたいなお話になったと思います。

100年前ではあるけれど、決してこの考え方は陳腐化したものではなくて、やはり今日また、過去あったと同様の光を輝かせながら、その教育理念というものを、今後実践していく必要があるのだろうということが、まず共通認識として出てきたのではないのかなと私は思います。

その中で、この教育理念というものは、学校だけではなくて、家庭の中においても必要な子育てにおける実践としての考え方にも結びついているというような気がします。

実は、それと同時に、この西条独創教育自体を知らない方も増えているという現実があるんだということですね。

実は、わが市は今47年で、3年先が50年周年になる中で、東広島市史を作るべく、準備を始めました。

とりわけ、わが市において近代史、つまり現在から近代、幕末以降ぐらいになるでしょうか、それを早く整理する中で、わが市の発展の歴史ということをもう1回検証する必要があります。

その中で大きなファクターは何か、我々が考えていかなければいけないものは何かというと、一つはやっぱり教育ですね。

近代教育の中で、どういうふうになが市は、発展してきたのかをまず掘り起こす必要があるし、それと併せて、酒造りの街でもありますから、そのあたりをしっかりと検証していく必要があるというのが、二つの大きな課題になっております。

そういう中で、市民の皆さんにもなが市で展開されたこの教育というものをしっかりと知っていただくということが、必要ではないかなと思ってしまして、今、そんな取り組みを進めているところです。

実は、教育センター的な話に、これから入っていききたいと思うんですけども、島本委員がおっしゃった、働くということ、かつては子供を育てるというのが、まさに教師の仕事であると。ところが働くというところにウエイトがかかってきたというのは、おそらく、業務負担がものすごくかかってきた時代と共通するんじゃないかと思うんですよね。

だからもう一度、先生たちが子供を育てるんだと、そういう意識で仕事ができるためには、どのような支援策なり、どのような教師を育てていったらいいのかということになってきたなど、お話を聞いていて思いました。

その中でいうと、学校教育部で今日的課題として、四つほど整理していますので、この辺りを少し掘り下げながら、そのためにどうしていったらいいのかという議論に結びつけていけたらと思います。

そこで、四つについてそれぞれご意見をいただきましょうか。

<津森教育長>

1個1個だと、ちょっと時間がかかってしまうかもしれません。

<高垣市長>

それでは四つの中で、特にこんなところに注意した方がいいのかというものがあいましたら、それをお願いします。

<津森教育長>

四つあって、どれも重要なんですが、項目の1番2番は全国的にもありますが、やっぱり私は、特に3番が非常に重要になるかと思っています。

実は、教職員の年齢構成を調べてみますと、学校によっては、30代40代が一人もいないところがあります。あとは、20代と50代しかいない。特に30代がガクッと減っています。

先ほど島本委員から、働くっていうよりは、子供を育てているという感覚というお話がありました。そういう感覚でいる先生は総じているとは思いますが、若い先生はそういう意識をあまり持っていないかもしれません。

坂越委員からありましたが、先生も個別最適に学ばないといけない、協働的に学ばないといけない、というところに感銘を受けました。

教職員が、オーダーメイドで学べるようなものやニーズにあったものが、あれもあるよ、これもあるよ、というように渡せる仕組みがあれば、先生方から見たときに、東広島市に行

けば学びたいことが学べる、力が伸ばせるとなって、東広島市での勤務を希望する先生が増えないかなと思いました。

それから、西条独創教育については1点だけ懸念があります。それは、「西条独創教育を見直して、みんなでやりましょう」みたいに水平展開するのは、ちょっと難しいところがあると思います。なぜかという、本市の学校が頑張ってきたのは、西条小学校を見て、「あそこに負けるな」とか、「なんで西条小学校ばかり脚光を浴びるのか」みたいな感じで、対抗心を持って頑張ったところがあるんですね。手法としては一緒に、同じようなことをしているんです。そういったところがあるので、「独創教育」という言い方はいいですが、そこに「西条」とつけると、反発とまでは言わないけれども、違和感を持つ先生もいるかなということを少し懸念しています。

<高垣市長>

一校一和文化を見ていると、学校がそれぞれ自分たちの地域の伝統をうまく創作しながら、切磋琢磨して競争しているわけです。これらは、たぶん「白壁」に対抗して、みんなやるんですよね。だから、津森教育長がおっしゃるように、「独創教育」はいいけど、そこに「西条」というのが付くと抵抗を持つ方もいらっしゃるんじゃないかなと思います。

例えばその「独創」を「共創」であるだとか、最近行われているような言葉に置き換える。実はそれがまさに中教審の理念であるということだから、それを実践するということになってくるのだと思います。

だから評価はするが、それにあまりこだわると、少し弊害が起こるというか、これはちょっと注意しておかないといけないなと思いました。ありがとうございます。

それでは、次に渡部委員お願いします。

<渡部委員>

私も独創教育という言葉については、「独創教育と言えば西条」というイメージで連結するというふうに感じております。例えば、適当かどうかはわかりませんが、「東広島教育」はどうだろうかという気がしました。

やはり9つの町があって、それぞれの学校で先生たちが頑張っている。そして、色々なスポーツや芸術分野でも成果が上がってきていますよね。そういうふうに考えますと、根っこの部分では西条教育や独創教育を思いつつも、看板としてはもう少し広い方が、皆さんに受け入れられやすいのかなという気はいたします。

それから今日的課題の中でいくつかありますけども、GIGAスクールの推進について、政府が今推し進めようとしていて、本市におきましても、タブレットを全員が持って勉強するという環境になりました。

ただ、現場で一番困っているのは、先生方がそれを使いこなして、色々な情報を駆使して、効率化といいますか、教師の働き方を改革するというのが根っこにあるんですが、現場ではそれに戸惑いもありまして、それを習得して自分のものにするための時間なり、研修の条件が揃っていないのだと思います。

ですから、そういうことに輪をかけて、現場ではどんどん授業を進めなきゃいけない。準備する時間がなかなかない。授業に追いかけて回される。それと同時に、生徒指導や職員の色々な仕事だとかあり、大変だと思います。

そういう中で、やはり先ほど京極委員からもお話がありましたけれども、いかにして支援するかという中で、外部的な支援、例えば会社などの民間の力を導入して、先生方の労力や時間を本来の方向に向けられるようにしてあげたらいいんじゃないかなと思います。

この資料には、現場の先生がどんなことに困っているのかということが具体的には出てきていないので、そういうところを実際に聞きたいなと思います。そうすれば、手当の仕方もあろうかなという気がいたしました。

以上でございます。

<高垣市長>

本来、GIGAスクール構想は、5年ぐらいかけてやる予定だったんですね。ところが、コロナ禍であったということで、いかに遠隔的授業ができるかということも、頭に置きながら、一気に導入したものですから、実はちょっと歪みがありまして、それをいかに活用するかというところの研修が必ずしも十分じゃない。我々もそれを意識しながら、人をつけていったんですけど、必ずしもうまくいっているわけではない。

導入後は何回か現場に行ったんですけども、先生において相当差がありますね。使いこなす先生、自らで教育コンテンツ的なものを作ってどんどん発信する先生もいれば、あんまりうまく使えていないなという方もいらっしゃる。

そこをいかにサポートしていける体制をとっていくのかということが、実はこれから大きな課題である認識はしてまして、この後の話ですが、またご指導いただきたいと思います。

それでは、坂越委員お願いします。

<坂越委員>

2点ほど。まず一つ目は個別最適な学びの実現について、ここにも書いてありますけれども、学習履歴や情報の集約、データの処理、これはこれですごく大事だし、有効だと思うんだけど、個別最適かといったときに、それこそ檜高憲三先生の独創教育ですよ。

量的な個別最適化だけでは駄目なんですよ。プリントを何枚やるとかいう話だけではなくて、質的な個別最適化をやらないと、その子その子の個性に合わせて独創的に発展できるような、そういう個別最適化をぜひこの東広島ではやって欲しいというふうに思います。

それから、二つ目は若年層の人材育成について、これは重要ですが少し難しい課題かと感じています。というのは、独創教育とか、西条教育の意味は十分わかるんだけど、僕は今大学で教員養成をやっています。18歳から22歳の学生を育てて現場に送り出します。彼ら彼女らに、子供たちのために、生きがいを持って、やりがいを持って育てる、という話で、頑張れって言いますが、それがどこまで伝わるかっていう部分は、正直十分できているとは言えません。

独創教育の理念・精神を、東広島教育の根本に置くということについては必要だと思うの

だけれども、例えば堀越先生が「私は教員時代に5時間しか寝てないんだよ」って書いていることについて、それを今の若手の22歳の教員に言っても、伝わらないですよ。

やっぱり、彼らが伸びていくためには、中教審のまとめに書いてありますが、対話であったり、彼らの現場での経験をブラッシュアップしてやるっていうことで、教員は変わるんだと思うんですよ。

その辺の人材育成の工夫といいましょうか、彼らがやりがいというものを自分の経験をベースにしながら成長していくような、そういう人材育成っていうのが必要なと思います。

以上です。

<高垣市長>

そうですね。なかなか今の学生は、子供を育てるという意識もしながらも、やはり自らも大切にしたい世代になっているので、その教育に向かう姿勢というのは、随分変わってきているところがあると思うんですよ。

だから、ある意味で、そういうベーシックなところも、教育というんでしょうか、大学で難しいのに、就職してどの程度できるのかという問題もあるかと思いますが、現場に入って、先ほどおっしゃったような対話であったり、その経験談をいかに繋げていくかという中で、感じてもらえるような仕組みがやっぱり必要なのかもしれないですね。

ありがとうございました。

それでは、京極委員お願いします。

<京極委員>

1番上の個別最適な学びの実現について、先ほど坂越委員がおっしゃったとおり、これはすごく難しいと思うんですよ。「言うは易く行ふは難し」だと思うので、まず、子供たちに対して、こういう学びを実現するには何が大事なんだろうということについて、少しずつ具体的な項目を見出すこと。それから、先生方にも、逆に個別最適な学びを与えないといけない。

じゃあ、どういう課題があるのかといった具体的なことを出していって、それを例えばこの教育センター的な組織でまとめて、みんなに見せてあげないと、わからないと思うんですよ。

言うだけではなくて、例えばA4の1枚ものの資料で見せてあげる。これで、「まずはここだよ」っていう指針を示してあげるようなことをしないと、難しいのかなと思います。

これは本当に全部がこれにかかっていると思うんですよ。先生方の問題もそうだし、子供たちの問題もそうだと思います。ただ、一遍にはなかなかいかないもので、できることからやっていくようなことをしたらいかがでしょうか。

<高垣市長>

今市役所の中でも、どうやってDXを進めていくかという議論してしましてね。わが市もまだ人口が増えていて、行政需要がどんどん大きくなっています。そういう中で、職員の数が本当に適正なのかどうかという議論も含めてやっているところです。

そういう中で、色々な業務の中のベストプラクティス、一番成果を出している仕事のやり方は何か、みたいなものをしっかり押さえながら、それをいかに共有化するために、デジタルを使っていくか、みたいなことでやっていこうという話をしているんですね。

今、京極委員もおっしゃったように、何が具体的に大切なのか、どうやったらいいのかという具体的なコンテンツ、そういうものをちゃんと資産として集めてそれを共有化していくという仕組みが、多分これから色々な分野で必要になってくると思うんですね。

その時にそれを集める機能をどこに持っていくかみたいな話が出てくるんだろうと思うんですね。

経験をどうつないでいくかというのも、まさにその部分で、これまでは伝承とか「見てならえ」みたいな所もありましたけれど、今はそれを例えば動画にすることによって、一気に共有化することもできるようになってきました。

そういうものも入ってきたので、やっぱりそういうことも使いながら、変えていき、教師の皆さんに、まさに子供を育てる喜びを感じてもらって、だんだんそういうふうになっていくのが必要なのかなというふうに、ここまで聞いて思いました。

それでは、島本委員お願いします。

<島本委員>

先ほどのGIGAスクールのスキルについて、私も得意ではないので苦手とされている先生方のお気持ちはよくわかります。スキルも興味関心も個人差は大きいと思われます。

先月視察させていただいた東西条小学校では、情報の免許を持った先生が小学校に配置されていました。また、教科担任制を導入されており先生の得意なものや持っている技術が、その職場の中で活かされることになれば、その先生も活躍できますし、他の先生方も学びあい学校全体が働きやすくなると思います。

それから、子どもにとって個別最適な学びというと、教室を中心とした授業のイメージがあるのですが、不登校の子たちが、一斉指導はなかなか難しいけれど、自分で選択できて、自己決定して頑張れる場や仕組みを取り入れています。SSRの取り組みです。

そこでは、居場所だけではなく成長できるように様々な学びのチャンスがあるのです。

しかし、個別最適となると、やはり部屋が必要ですし、免許・資格を持った人、それから、外部の専門家といった人たちの協力も入れて、チームでやっていかないと、学校だけでやっていこうとすると、パンクするのではないかと思います。

それから、人材育成についてです。初任者と話をした時に、「なんで先生になったの？」と聞いたら、ほとんどの人が「子どもが好きだから」と答えますが、一か月もすると子どもが好きだけではできない、ということに気づきます。

でも、最後はやっぱり子どもが好きでなきゃこの仕事ができんよねという話になります。そのことが実感できるまでには少し時間が必要になります。その悩みや葛藤を聞いてもらえる相談できる時間が大切なのだと思います。

研修をして、スキルを高める、勉強をするということも大事ですし、よい授業を見て学ぶということも大事なのですが、自分が今何に困っているのかということ相談して聞いても

らえる、そういうシステムや場所というものも必要かと思います。

今の若い先生方は発想力や表現力、プレゼン力など高い技能を持っていると思いますが、同時にこだわりも強いなと感じています。ですから一方的なあるべき論の教育論や指導ではなく、寄り添いながら、相談体制を構築していくことが必要かと思います。まさに先生方が自ら主体性を持って教壇に立てるように応援ができればいいなと思います。例えばそれが、教育センター的な組織があれば、そういったこともできるのかなと思います。

<高垣市長>

先ほどのお話で、先生にも個性や得意な分野、苦手な分野があるので、先生のそれぞれ持った個性をうまく活かして、学校を集団として、力を発揮するような、そういう仕組みが必要なのかもしれませんね。

ありがとうございます。

それでは、西村委員お願いします。

<西村委員>

私は保護者という立場で教育委員をさせていただいているので、どうしても教育関連のことについて詳しくはお話ができないんですけれども、先生方の働き方改革に関わる2番のGIGAスクールの推進について、どうしてもGIGAスクールの推進となると、教育のお話になるかと思うんですけれども、今年度、教育研究会で色々な小・中学校を回って見させていただいた中で、いろいろと工夫をされて、タブレット端末を使って、授業をされていました。

その中で、安芸津中学校の視聴覚の研究会に参加した時に、生徒の皆さんが、健康観察をタブレット入力していますっていうのをおっしゃっていたんですね。

それで、健康観察っていうのは、このコロナ禍の中で、体温を測って体調を記してというものですが、これをタブレット端末で生徒が自らやっているというお話を聞きまして、これは東広島の小中学校で共通してやっていることなのかなというふうに思いました。

あえて質問はしなかったんですけども、そういった共通のフォーマットがあれば、紙に書いて、保護者に判子を押してもらわなくても、子供が自らできるもの、親が関わってやらなくてもいい、生徒児童が自らできることっていうのが、実は学校の先生方が色々見ている中にもあるのではないかなという感想を持ちました。

なので、GIGAスクールの推進というものも、進めることと並行して、学校で先生方が面倒を見ている共通のものを、フォーマット化して、利用できるようなになれば、先生たちの負担も減るのではないかなと思いました。

もう一つ、4番について、こちらの文章にあります「家庭の教育力の低下」というのは、同じ保護者として本当に痛感しております。

何でも学校に連絡をする、電話をする、相談をするということで、今までは時代が違えば、他の人が手助けをしてくださっていたことが、今、子供に関わることは、担任の先生の方に、相談するということが、家庭の中で認識が広まっているのではないかなという懸念がありま

す。

なので、先生方にも学びが必要だということもありますけれども、各家庭や地域などでもこういった学びということ、家庭教育の向上というものが、教育の現場に関わる教育として、すごく大事なことなのではないかなと思いました。

以上です。

<高垣市長>

家庭の教育力低下をどう支えていくかは、なかなか難しい問題であります。今、わが市は、地域共生社会をどう作っていくかという取り組みをしています。

例えばハンディキャップがある子供を、その家庭だけではなくて地域がともに子育てってような枠組みを作っていきたいということで、これはコミュニティ単位でいろんなことを進めています。

その例として、黒瀬で「みんクロ」という面白い取り組みをしています。ここは浄土真宗の西教寺というお寺さんなんですが、そこの本堂をお借りして、おじいちゃんおばあちゃん、それからお母さん、そして子供たちが一同に集まって、書道を教えたり、音楽を教えたりとか、お花を活けるのも教えたりとか、或いは卓球なんかも一緒にやったりとか、そんな取り組みの中で地域が子供を育てるというような取り組みをしています。

もちろん保護者に対してのアプローチもあるんだろうと思いますが、これはもうなかなか難しい。だから、今はそういう形で何とかできないかなというのが一つ。

もう一つは、やっぱり保育とか幼児教育時代に、いかにしっかりサポートしていくのか。この前提として「ネウボラ」というような取り組みがありまして、妊娠してからずっとサポートしていくというところで、家庭に対するコミットメントみたいなことも、やっていくような仕組みです。これは非常に重要で、ここでうまくいってなかったら学校が困る、という現実もあります。そのようなことも、今やっているところです。

それぞれ課題解決の方向性も聞かせていただきましたけども、やっぱりそうするといかに、人材の育成をしていくのか。環境として、今時間外が相当数になり、先生たちの負担がかかっている中で、それをどう解消していくか。

人をつけるということも、もちろんやっていく必要があると思うんですけどもそれだけでは解決しない。

そういう中で、ベテランの先生方が持っているノウハウを、いかに伝えていくのか。もちろん実践も必要なんでしょうけど、それをもっと効率的に伝えていく仕組みというのを考えていく必要があります。

もう一方では、そういう先生方は、実はあんまりお得意じゃないというデジタルの世界があります。それを併せ持った形でどう指導していくのか。ちょっとイメージとすると、本当に優れた教育力のある先生的能力を少し分解しながら、それをデジタル化して共有化していくような、そんなことが必要になってきた時代なのかもわかりません。

一遍にはできないと思うんですけども、そういう意味でいうと、そういう先生方を養成し、サポートする、島本委員からもありましたけど、メンター的な、相談相手になるような、そ

ういう人材ストックみたいなものが、やっぱり必要なのではないか。ということが、教育委員会の津森教育長以下と議論する中で、少しそんな方向性が出ていました。それに対しても少しご意見をいただこうと思います。

まずは、津森教育長からそのイメージをお話していただけますか。

<津森教育長>

スクールサポートセンターを4年前から作ってまして、1人のコーディネーターが学校のニーズに応じて、あちこちの退職者に声をかけて、例えば、あの学校で習字を教えてくれとか、この学校で草を刈ってくれといったことをしています。延べ130人が登録していて、実際に動いているのは60人くらいです。

学校をかなり具体的に支援していて、そういう人たちは大体豊かな経験を持っています。

だから、そういった方々をメンター的な形にして、各学校の相談に行くとか支援に行くとか、経験談を伝えるとか、そういうことをきちんとコーディネートできるような支援センター的なものがあつたらいいんじゃないかなというのが私のイメージです。

働き方改革について、今日の皆さんの意見を聞いていると、教師の学びをどう作るのかということに、一つは収れんされるような気がしています。そこをやっぱり「東広島教育」という打ち出しもいいでしょうし、それからやっぱり外部の力を借りることも必要でしょうし、何か先輩の経験をつなぐってということも必要なことだということで、たくさんの意見をいただきました。

この支援センター的な組織がどのようなものになるかはわかりませんが、そこですべて解決するわけではないと思います。けれども、何かそのような教師を支援する体制というのが打ち出せたら、現場も元気ができるんじゃないかなという思いです。

ただ、「教育センター」という名称はあまり使いたくないなと思っています。そこへ行って勉強して帰るっていうイメージではなくて、そこから支援に行くというイメージでいます。

<高垣市長>

ありがとうございました。

それでは、渡部委員お願いします。

<渡部委員>

今の現場の先生方のサポートにつきましては、非常に大事なことだと思います。デジタルばかりが万能ではなくて、退職した先生方の中には、板書をしっかりとやってくれる方がおられますが、あれはやっぱり子供がよく理解できるんじゃないかなっていう気がいたします。

教員の研修について、私も長く大学に勤めている時に、半年、或いは長い方で1年間、研修して、それから現場に帰るという方もおられました。そういう長期間でなくても、例えばあるスキルを勉強するために3日間の研修に行く、或いはその研究会が何曜日にあって、4回通えばある資格がとれるようなのもあると思います。

そういう中で、こういったベテランの先生方がその穴を埋めるとか、そういうような仕組みができないかなと思います。

ですから、半年や1年間の研修でなくても、そういった有効な学習をして、お帰りになったら、その能力を発揮できるということもあり得るものではないかと思います。

<高垣市長>

最近は研修といっても、遠隔研修も結構ある。ただ、先生方に逆に時間がない。仮に夜にそういった研修を受けようとしても時間がない。だからそういう時間を取って差し上げて、そういうコンテンツをうまく活用しながら、指導していく、支援していくというやり方も一つあると思うんですね。そういう教材提供であるとかそういうものあったらいいのかもしれないですね。

ありがとうございました。

それでは、坂越委員お願いします

<坂越委員>

そういう研修のコンテンツをプラットフォーム化して、共有しようという動きが出ていますので、そういうものもやっぱりどんどん活用していけたらと思います。

あと、メンター、特に若手の先生方に対して、悩みがあるときに寄り添ってくれる人が必要だということも、本当にこれはそうだと思います。やっぱり色々なことでわからないことが多いですからね。

と言いつつ、ちょっと嫌なこと言います。他県で出ていた事例ですけれども、初任者の研修に指導者が付いていて、マッチングが良くないのかもしれませんが、「こんなこともできないのか」というふうに怒られるばかりで、相談にも乗ってくれない。

つまり人によるというところが結構大きくて、これを防ぐためには、ベテランの先生方の協力を仰ぐことはもちろんなんですけど、それをコーディネートする、やっぱり、センターとは言わなくても、やっぱりリーダーシップを発揮して、ちゃんとその仕組みを動かしてくれるような、そういう体制を構築することがいるんじゃないかなあということが一つ。

それと、やっぱりベテランの経験を継承していくことと同時に、若手目線で言いますと、悩んでいる若手は、仲間が欲しい。ピアーですよ。ここ2、3年で採用された人たちが、悩みを語り合ったり、「そっちはどうしてる？」みたいな話ができるような、そういう時間と場所が欲しい。ただ、もう場所は要りませんね、今は。ネットでできますもんね。

そういうものがあってもいいかなというふうに思います。

<高垣市長>

確かにコーディネートは重要で、合わなかったら最悪ですよ。

ありがとうございました。

それでは、京極委員お願いします。

<京極委員>

少し話がずれるかもしれませんが、先ほど資料で檜高校長先生の吹き出し中に、「教師があまり教え過ぎて」とあります。

最近、我々大学もそうなんですけど、文科省のせいもあるかもしれませんが、教えすぎで、こうなると、絶対に新しいものは出てこないと思います。なので、こういうことも考慮したメンター的な内容にしていきたいなと思います。

もうひとつ、私はいつも言うのですが、東広島市の自然ってのはすごく大事だと思います。GIGAスクールはあくまで仮想空間なので、そういう実空間と結びつける形が必要だと思います。やっぱり若い先生は、仮想空間が得意で、年配の先生は実空間が得意ですね。だからその辺の思いが感じ取れるような仕組みが作れたらいいんじゃないかなと思います。

以前にも言ったことありますが、前の近畿大学の学長が医学部の先生だったので、話を聞いたのですが、学生がカエルの解剖をしたことがなくて、手術を見て卒倒するそうですが、それは当たり前の話ですね。やっぱりこういう実際の体験はすごく大事なことで、それを入れた形の教育をすべきだと私は思います。どうもコンピュータが先に行き過ぎているような気がします。やっぱり人間ですから、実空間を活かすような取り組みができたらいいなと思います。

<高垣市長>

ご指摘いただいたように非常に自然豊かな我がまちなので、豊栄あたりはもう全町丸ごと博物館と言われるくらいのところですよ。来年あたりから広島大学と連携して、そこへ大学にある自然博物館の分館を豊栄支所に作らせていただいて、そういういろんな動物の剥製であるとかを実際に見えるような場を作りたいと思っています。

やっぱりデジタルと実空間の中で実際体験するようなことができる地なんですよね。だからそういう地を活かした教育が展開できるようなことも、例えば教育センターのような組織でそういったコンテンツみたいなものを作ってもら。そういうわが市の特徴を活かした形のものが展開できたらいいなと思います。

ありがとうございました。

それでは、島本委員お願いします。

<島本委員>

実際に東広島市の色々なところを見て歩くのは大事なことでと思います。

東広島市では、他市で4年間教員をし5年目で東広島市に異動された先生だけを集めて、バスで市内の要所を回るというバスツアーがあります。この地で教員をするということで、この地に愛着を持つ意味では、教えてもらうというだけではなくて、自らの足で学んでいくのも大事なことでと思います。

社会科サークルでは、社会科の好きな先生たちが集まって、空港ができた時には空港に行ったり、工場ができたなら見に行ったりというふうに、実際にその現場に行ってみて聞いて感じて教材化していくという活動をされています。悩みを持った時に駆け込み寺的な機能も必要ですし、自ら東広島の良さを見つけていくような、こういう楽しいツアーもいいなと思

います。

最後に、センター的な機能になると、ある程度メニューを出さないと、行きたいけれど、何をやっているのかがわからない。それからメニューを広げても、じゃあ誰に担当してもらうのかという問題もあると思います。このあたりについて、どんなメニューにするかは、やっぱりニーズをしっかりと踏まえて、それに合ったようなものにしていかないと、作っただけでも誰も利用しなかったというふうになるのではないかなと思います。

現場の声をしっかり聞いて、そのニーズにあったメニューができれば、活かされるのではないかなと期待しています。

<高垣市長>

ニーズを踏まえたメニューを作っていくことは本当に必要なことだと思います。

それでは、西村委員お願いします。

<西村委員>

教育センターについて、要望になってしまうかなと思うんですけども、資料を見たときに、どうしても先生方への教育というものが中心なのかなって思っていました。けれども、ぜひ地域の力、東広島市民の地域の力というものを取り入れたセンターにしていきたいというのが、要望の一つであります。

これは高齢者の方からタブレット端末を自由に操作できる小学生まで、色々な年齢層、色々な人たちが、東広島の教育というものを感じられるものにしていただけたら、すごくありがたいなと思っております。

東広島は教育が素晴らしいということで、そういった象徴になるようなものにしていただき、段階はあるかと思うんですけども、少しずつでもそういった形で色々な人が携われるものになっていただけたらと思います。

どうしてそう思うかということを申し上げますと、東広島市も小学校のプール開放で、教育委員会の方から、人材を毎年雇用していただいて、それでプールの監視員を地域の方がされております。

実は私も経験があって、そのプールの監視員を自分の小学校でしたことがあるんですけども、実はそういった取り組みをしているのが、東広島市くらいで、PTAで話をすると東広島市はそういった取り組みをしている本当に稀有の存在でした。なので、市民が学校に携わるということ、保護者でなくても携わるということを見ると、すごく地域と学校を繋いでいるなというふうに感じました。

そして、コロナ禍で水泳の授業というものが小学校の授業でネックになった一つだったかと思います。例えば西条小学校のように、クラスが多いところは、交代で先生たちが見るので、コロナ対策も何とか乗り越えられたのかもしれないけれども、クラス数が少ないところは、水泳の授業の運営が大変なので、PTAがお手伝いに行こうと思っていました。ただ、色々ハードルが高い部分もあって、なかなか難しいみたいなので、もう少し市民の力というものを借りた教育センターというのもメニューの中の一つに入れていただけたらありがた

いと思います。

<高垣市長>

地域が支える部分でいうと、冒頭、津森教育長もおっしゃっていたコミュニティスクールがあって、ああいう形で地域が学校に関わる人材もやっぱり作っていく必要があると思うんですよね。

やっぱりそれにはいろんなノウハウも、情報提供もしながら、こういうやり方したらいいですよみたいなことをやっていく必要があるかもわかりませんね。

そういう機能も少し必要だというご指摘いただいたので、そういうあたりについて、これから考えていきましょう。

ありがとうございました。

皆さんの話を聞いていて、改めて坂越委員からいただいた資料がすごいなと思います。11月15日の中教審の特別部会の「令和の日本型教育を担う教師の学び」というところで整理されているのを「令和の東広島型教育を支える教師の学び」に置き換えたら、ばっちり言えるなあという感じがしました。

だからこういう方向性の中でどういうふうに具体化していくのかというのが、これから事務方とも、さらなる情報を取りながら、そこに具体的なセンター的役割を持つ機能を作っていく方向で、これから検討していきたいなというふうに思いました。

そういうことで、何か方向性が見えてきたような感じになってきました。今日は貴重な意見を色々いただきまして、ありがとうございました。

その他何かこれだけは言っておきたいというものあれば、お聞かせいただきと思います。

それでは、坂越委員お願いします。

<坂越委員>

もう言わずもがなで、市長もちちゃんと認識されていると思うんですけど、やっぱり教員研修、教員の力量アップということになると、もうすぐ近くに立派な教育学部があって、学部内のセンターとしてこういう教員の養成・採用・研修に関わって研究しているような部署もあったりするので、またその辺と連携をされるといいかなと思います。

<高垣市長>

これはもう大学と連携していく必要があると思っています。ぜひ進めていきたいと思っています。

その他、よろしいでしょうか。

それでは、どうも長時間にわたってありがとうございました。